天使におくる
メッセージ

天使におくるメッセージ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16452811

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, レイラ

「天使のおくりもの」「村のくらし」の少し後の話。引き続き、戦後のネイル村での一幕。
やはり子どもネタがあるので苦手な方は要注意。ヒュンマなら何でも許せる方向け。

フォロワー様からアイデアをいただき、書いた作品。
ツイッターでこの話題で盛り上がり、気が付いたら勢いだけで書いていました・・・。間違いなく、最短記録。
表紙は芹沢時雨様user/142271にお借りしました。

2021.11.7　ポイピクにて公開したものに、加筆修正。

天使におくるメッセージ

「ただいまー！」
　明るい声とともに玄関の扉が開き、愛妻の帰宅を告げた。一足早く帰宅していたヒュンケルは、その声に顔を上げ、彼女に声をかけようとした。
「ああ、おかえ・・・。」
　だが、その声は、途中でつまり、続かなかった。ヒュンケルは、ぎょっとして息をのんだ。
　帰宅したマァムは、彼のそんな様子に気付かず、いつもと同じように、闊達な様子で、伴侶に話しかけていた。
「ちょうど、粉ひき小屋の前を通りがかったらね、頼んでいた小麦、挽き終わったよって言われて、持って帰ってきちゃった。あとで、母さんのところにも分けて持っていくわ。
とりあえず、キッチンに置いておくわね。」
　そう言って、抱えてきた大きな小麦の袋をどさりと、キッチンの床に置いた。優に３０ポンドはありそうな小麦袋は、マァムが床に下すと、その重さで、ドスンと、横倒しに倒れた。
「安定しないわね。」
　マァムは暢気にそんなことを言っているが、ヒュンケルは青くなった。
「・・・マァム・・・。」
　彼は、とつめて感情を押し殺し、かろうじてそれだけを口にした。
「小麦は、俺が取りに行くと言っておいただろう？なんで持って帰ってきた。」
　感情的になるまいと努力はしているが、言葉の端々から、彼の腹立ちがにじみ出ていた。だが、マァムは気にかける様子もなく、何でもないことのように言った。
「だって、通りかかったから。わざわざヒュンケルに行ってもらうのもね。」
　全く彼の意図を察していないかのような物言いに、ついにヒュン

ケルも声を荒げた。彼がマァムに怒ることなど、滅多にないことだったが、このときは仕方がなかった。
「マァムっ！重いものを持つなとこの前も言っただろう！自分一人の体じゃないんだ！もっと大事にしてくれ！！」
　だが、マァムは、口をとがらせて反論した。
「大丈夫よこれくらい。それに、あんまり動かないでいたら、体が鈍っちゃうわ。」
「産み月まで、まだ、ふた月もあるんだ！その間に何かあったらどうするつもりなんだ！」
「心配しすぎよ、ヒュンケル。むしろ、貴方の声にこの子が驚いちゃうわ。」
　そう言って、マァムは自分の腹をさすった。マァムが手を当てた彼女自身の腹部は、南瓜でも抱えたかのように大きく膨らんでいた。
　ヒュンケルは、それ以上言葉が継げなくなり、ぐっといらだちを飲み込んだ。
　マァムのゆったりとしたワンピースのすそが揺れた。
　大きく膨らんだ腹部に、ウエストに継ぎ目のないワンピース。どこから見ても、彼女がもう一人の命を抱えていることが見て取れる。
　待望の、ふたりの第一子だ。
　だが、ネイル村でも仲睦まじいと評判の二人が、ここのところ、言い争うことが増えていた。それは、口論ともいえないような、些細なものではあったが、それまではほとんどなかったものだけに珍しいものだった。
　そしてもめごとの発端は、いつも同じだった。
　すなわち、マァムが無茶をしているのではないか、というものだった。

　マァムは、母の家のリビングで、差し出されたティーカップを両手で受け取った。温かな湯気が立ち上り、独特の香気を運んできた。そっと喉を潤すと、さっぱりとした草の香りの中に、ほんのりとはちみつの甘みが感じられた。

レイラが入れてくれたハーブティは、妊婦に合わせたものだ。このとき、マァムに差し出されたものは、ネトルにエルダーフラワー、ステビアをブレンドし、はちみつで甘みを加えたものだった。
　マァムは、優しい甘さに穏やかな気持ちになり、ほっと息を吐いた。彼女は、カップの半分までを飲むと、カップをテーブルに置いた。
「おいしい。母さんの入れてくれるお茶はいいわね。」
　マァムがそう言って笑うと、レイラも嬉しそうに微笑んだ。
「急に来たからびっくりしたわ。ヒュンケルと何かあったの？」
　マァムは、図星を差され、言葉に詰まった。さすが、２０年以上も彼女の母をやっているだけはある。
　マァムは、重い口を開き、ぽつり、ぽつりと言葉を紡いだ。
「・・・何かってほどじゃないけど・・・。」
「うん。」
「・・・昨日、また怒られちゃって・・・。私が、小麦袋、持って帰ってきたから・・・。」
「うん。」
　レイラは、ただ相槌を打って、娘の言葉を受け止めていた。その安心感に、マァムは、つい、本音をこぼした。
「でもね、母さん。ヒュンケル、ちょっと、過保護過ぎない？ここのところ、遠くまで歩くなとか、重いもの持つなとか、あれもダメ、これもダメばっかりで。
　私、病人じゃないわよ。
　そんなに心配しなくても大丈夫なのに。」
　自身の伴侶に文句を言いながらぼやく娘に、レイラはくすくすと笑みをこぼした。その様子に、マァムは口を尖らせた。
「もう、母さん！笑い事じゃないのよ。
　・・・いままで、こんなケンカしたことなかったのに。」
　本気で困っていそうな娘に、レイラは軽く詫びた。
「ごめん、ごめん。
　心配なのよね、あの子は。自分の体のことじゃないし、わからないから。」

だが、マァムはレイラに反論した。
「でも、だから、母さんの医学書、読みに来たんでしょ？」
マァムは、子どもができたとヒュンケルに知らせたときのことが忘れられなかった。
マァムが告げると、ヒュンケルは、目を見開いて、ひどく驚いた顔をした。そして、気づかわしげに、そっとマァムの背に腕を回し、彼女の身を柔らかく抱きしめた。
マァムの耳元で、ヒュンケルがささやくように、言葉を紡いだ。
—ありがとう・・・マァム。
その声は、震えていた。
マァムの肩に顔をうずめていた彼の顔は見えなかった。
だが、見なくとも、マァムにはすぐに分かった。
彼は泣いていた。
生涯あり得ないと、望むことすら許されないと彼が戒めてきたことが、現実に告げられ、その大きすぎる幸福に涙したのだ。
しかし、マァムは、その涙に気付かないふりをし、彼の背に腕を回した。そして、そのまま、彼を抱きしめ返した。
マァムは、彼の思いを感じ、そして、新たな命の訪れを喜んでくれていることに安堵したのだった。
そう、確かにヒュンケルは喜んでいた。
だが、それと同時に、彼には、驚きと戸惑い、不安が巻き起こったようで、しばらくの間は落ち着きがなく、マァムにもどう接していいのかわからない、といった様子で右往左往していた。
すると、少しして、ヒュンケルは、レイラの元を訪ねた。
レイラは、ネイル村では、医業を一手に引き受けており、妊産婦への対応も彼女の仕事だった。そのため、レイラの家には、妊娠出産に関する医学書が、何冊もあった。
ヒュンケルは、自分の仕事の合間に、レイラの自宅に通い詰めると、それらの書物を片っ端から読破していった。
自分が子どもを持つことなど、それまで考えたこともなかったであろう彼にとって、マァムの妊娠は、喜びであるとともに、大きな衝撃であったようだった。
彼なりに、まったく知識も経験もない分野のことだったから、ま

ずは知識を埋めようとしたのだろう。その努力は買ってやりたいところだった。
　だが、その努力が、思わぬ副作用をもたらした。
　マァムの言葉に、レイラは苦笑した。
「そうなんだけど・・・そのせいで、あの子の知識が偏っちゃったのよね・・・。」
　医学書に記載されているのは、「異常な妊娠経過に対する対処法」と「胎児や産婦に命の危険が生じかねない出産における対応策」だった。そのような内容が重点的に書かれていた。
　医学書の役割としてはそうだろう。順調な妊娠、出産であれば、医師が横から手を出すべき事項は相当に限られている。だからこそ、医師が介在しなければ命が失われかねない重大な局面と、それに対する対応に紙面を割くのは、当然だ。
　そして、この時代、まだまだ出産で命を落とす女性は少なくなかった。
　そのため、レイラの持つ医学書を読み漁ったことで、ヒュンケルにとっては、命の危険も生じうる「異常な妊娠出産」の割合は、実際よりもずっと高いものとなっていた。
これに対して、やや楽観的なマァムは、「異常な妊娠出産」の生じる割合を、実際よりも少なく見積もっていた。
　おかげで、二人の感覚が完全にずれてしまい、それが、ささいないさかいの原因となっていた。
　マァムは、頬を膨らませて、不満を口にした。
「もう、そんなに心配することないのに。順調なんだから。
　母さんからも言ってよ。」
「私が言ってもしょうがないでしょ。」
「義理の母として、じゃなくて、医師として、ならヒュンケルも聞いてくれるわよ。」
「そうかもしれないけど、それよりも、あなたがまず、話をした方がいいわ。」
　レイラは、マァムを諭した。
「ヒュンケルは、自分の体のことじゃないからわからないし、不安なのよ。例えばね、お腹が張ったときには休むことって知識はあっ

ても、あなたのお腹が張っているのかどうかは彼にはわからないでしょう？あなたが大丈夫って言っても、無理をしているんじゃないかって心配して、不安になっているのよ。」
「私が大丈夫だって言っても？」
「だって、あなた、実際に無理してきたでしょう？大魔王と戦ったときだって。限界まで無理してたじゃない。」
　そう言われると、マァムには返す言葉がなかった。
　黙ってしまった娘に、レイラは優しく微笑んだ。
「ちゃんと話をしてくればいいわ。あの子は、きっとわかってくれるから。」
　そして、医業に携わる者らしく、医学的な知識を一つ、娘に授けた。
「そうそう、マァム。このくらい言ってやってもいいわよ。
　あんまり動かないでいるとね、股関節が固くなるし、皮膚も伸びが悪くなるから、出産のときに、会陰が裂けてしまうのよって。だから、ちゃんと動かないといけないんだってね。」
　聞いているだけで痛い、と思ったマァムは、げんなりした顔をした。

　その日の夜、夕食を終えると、マァムは、ヒュンケルの淹れたハーブティーで体を温めた。
　このところ、食事の後片付けは、ヒュンケルがやってくれていた。マァムを長時間キッチンに立たせたくないという、彼なりの配慮なのだろう。そして、後片付けをしながら、ハーブティーを淹れるというのが、このところの習慣になっていた。
　後片付けを終えた彼が、ダイニングテーブルに戻ってくると、マァムは、ヒュンケルに声をかけた。
「ヒュンケル・・・あの・・・昨日は、ごめん。」
　マァムが詫びると、ヒュンケルも、素直に謝罪の言葉を口にした。
「いや、俺の方こそ、声を荒げて悪かった。」
　すると、そんなヒュンケルに、マァムは、自分の希望を訴えた。
「でもね、本当に大丈夫なのよ。少しくらい体を動かした方が、私

も気分がいいし。」
すると、すぐさま、ヒュンケルが反論した。
「お前がそう思うのも分かる。
だが、それで、早産になったらどうする。取り返しがつかないだろう？
悪いが、もうしばらくは我慢してくれ。」
　このところのいつもの堂々巡りの会話に入ろうとしていた。
　しかし、このときは、マァムは、ヒュンケルの言葉に頷いた。
「うん。ヒュンケルが心配してくれているのはわかっている。」
　そして、マァムは、そっと彼の手を取った。そのまま彼の右手を両手で包み、自分の腹部へと導いた。
　ぱんぱんに膨れた大きな腹に自身の手を置かれたヒュンケルは戸惑った。マァムは、そんな彼をまっすぐに見つめて言った。
「ヒュンケル、私を見て。」
　その言葉に、ヒュンケルは引こうとした手の力を緩めた。マァムに任せることとした。
　マァムは、ヒュンケルの手を自分の腹部に置き、そのまま、彼の手の上に自分の手を乗せた。ヒュンケルは、なされるがまま、椅子に座ったマァムの前に跪く格好となった。
　ヒュンケルの手に、マァムの手と腹の温かさが、じんわりと染みてくる。
　やがて、彼は、手の下に、思いもよらない感触を感じた。
「・・・え？」
　ヒュンケルが動揺したのをマァムは感じたが、そのまま彼の手を離さなかった。
　ヒュンケルの手が、さらに、先ほどの感触を強く感じ取った。
ヒュンケルは、戸惑ったまま、マァムに尋ねた。
「・・・動いている、のか・・・？」
　マァムはうなずいた。
「そう。姿は見えないけど、元気だってわかるでしょう？
　もっと前から、私は、この子が動いていて、元気だって、感じていたの。」
　そう言って、マァムは優しく微笑んだ。

「ごめんね、ヒュンケル。私は、自分の体のことはわかるし、こうして、この子のことも感じられる。だけど、貴方からは見えないことだったから、不安にもなるわよね。心配かけてごめんなさい。」
「・・・いや・・・。」
「約束するわ。私も無理はしない。おかしいなと思ったらちゃんと言うわ。だから、ヒュンケルも、私を信じて。」
　マァムは、まっすぐにヒュンケルを見つめて言った。その言葉に、ヒュンケルは、これまで、マァムが、実際には本心を隠して無理をしているのではないかと、心のどこかで疑っていたことを恥じた。
　ヒュンケルは、素直に詫びた。
「・・・すまなかった。」
　すると、マァムはかぶりを振った。
「私も悪かったのよ。
　母さんに言われたわ。無理してきたでしょうって。
　そうよね。我慢して無理してきた私が大丈夫って言っても、心配よね。
　だから、ちゃんと、ヒュンケルにもわかるようにしないとって思ったの。この子も、私も元気だって。」
「マァム・・・。」
　そうして、マァムは、母から聞かされたばかりの話を口にした。
「あのね、ヒュンケル。母さんから、面白い話を聞いたの。赤ちゃんって、みんな、自分で生まれる時を選ぶんですって。もう大丈夫だって思った時に、ちゃんと、自分で決めて生まれてくるんですって。
　だから、私も、この子が自分で出てこようと思うときを信じて待とうと思ったわ。」
　すると、ヒュンケルは、穏やかな笑みを浮かべて、マァムの言葉に頷いた。
「・・・そうか・・・。なら、俺もそうしなければな。」
　すると、マァムは、今度は思わぬ言葉を述べた。
「それにね、赤ちゃんって、結構お腹の外のこと、聞いてるみたいよ。」

「聞いてる？」
ヒュンケルが聞き返すと、マァムは、穏やかに微笑んだまま、レイラから聞いたもう一つの不思議な逸話を語った。
「そう。
　あのね、ロモスの王都に出稼ぎに行く予定だった若い男の人がいて、奥さんのお腹に赤ちゃんがいたんですって。でも、いつ生まれるかわからなくて、もうすぐ出稼ぎに行かなきゃいけないしで、その男の人はね、奥さんのお腹に向かって、『何日までに生まれてきてくれー』って、ずっと言ってたんですって。
　そうしたら、本当に、その男の人が言った日に生まれてきたんですって！」
「偶然じゃないのか？」
「そうかもしれないわね。ただの偶然かも。
　でも、そうじゃない、赤ちゃんが聞いていたんだって思った方が面白いじゃない？」
「・・・そうだな。」
「そういうお話、私は、好きよ。」
　そう言って、マァムは微笑んだ。
「だからね、ヒュンケル、この子にも、私たちの声を聴かせたいなあって。
　あなたを愛してる、会えるのを、待っているわよって。」
　そう言って、マァムは嬉しそうに微笑んだ。
　その笑顔を見てヒュンケルは思う。
　マァムにはかなわない。いつも彼女は、自分を明るい方向へと導いてくれる。
　ヒュンケルは、マァムの腹部に右手を置いたまま、腰を浮かせ、左手を彼女の背に回した。そのまま、マァムを柔らかく抱きしめた。
　ヒュンケルは、マァムの耳元でささやいた。
「・・・愛している。この子も、お前のことも・・・。」
　この言葉が、まだこの世のものではない天使に届いていたかどうかは、わからない。

レイラは、吊り棚から、柔らかい掛布を取った。手拭きくらいの小さく、薄い布地がレイラの手に収まり、吊り棚に置かれたものが露わになった。

　普段は、この生地をかけて保護していたそれは、小さな額だった。

　レイラは、それを手に取ると、そっと、ダイニングテーブルの上に置き、自分はその前の椅子に座った。

　額の中からは、若い、快活な男がレイラを見つめていた。

　その男を見つめながら、レイラは困ったような笑みを浮かべた。

「私、もうすぐおばあちゃんよ。まだ、こんなに若いのにね。」

　額の中の男は、変わらない笑顔でレイラを見つめ続けた。

　レイラは、彼に向かって語り掛けた。

「ロカ、マァムに子どもが生まれるわ。あとふた月で、産み月になる。ちゃんと、貴方が守ってあげてね。大事な娘と孫なのよ。」

　そう言いながら、レイラは、マァムを生む直前のことを思い返した。

—レイラ、重いものを持つな！

—ちゃんと座ってろ！遠くまで歩いていくんじゃない！

　額の中の男の声が蘇った。

「貴方もそうだったわね。過保護なくらい、私を心配して。

　でも、ちゃんと、私もマァムも無事だったでしょう？」

　レイラは苦笑した。

　男親というのは、そういうものかもしれない。

「マァムはきっと大丈夫よね。だって、貴方がついているんですから・・・。」

　レイラは思う。

　マァムを目の中に入れても痛くないというほどにかわいがっていたロカは、きっと、マァムを守ってくれる。だから、マァムとヒュンケルの子どももちゃんと無事に生まれてくる。

　レイラは、祈った。

　新しい家族に、幸いあれ。